試験と研修

第042号
2018.7

公共部門の人材確保

市長インタビュー（香芝市長）

公共部門の人事試験情報

新教養試験　初の実施

特集　創造力・想像力を高める

『未来新聞』というアイデア創出手法～遠野における「未来共創」の挑戦～
第1部　「みんなの未来共創プログラム」と『未来新聞』
第2部　遠野における『未来新聞』活用事例

一般財団法人 公務人材開発協会
公益財団法人 日本人事試験研究センター

特集　創造力・想像力を高める

『未来新聞』というアイデア創出手法 ～遠野における「未来共創」の挑戦～

第１部　「みんなの未来共創プログラム」と『未来新聞』

未来新聞株式会社代表取締役　森内真也（もりうちしんや）

柳田國男の「遠野物語」で知られる岩手県遠野市が今、住民参加型の地域活性化が進みつつある場所として注目されています。

2014年４月から未来新聞株式会社は遠野市に設立された「遠野みらい創りカレッジ」にて、富士ゼロックス株式会社、有限会社ウィルウィンドと共に、「みんなの未来共創プログラム」（以下「みんなの未来」）というプログラムを提供しています。弊社の『未来新聞プログラム』が「みんなの未来」の中核部分となっています。先般、遠野市役所からのコメントでは「地方創生は取り組んでも、現実化されていくことがあまりないのですが、遠野では書かれた『未来新聞』の内容が現実化しています。今では欠かせない存在になっています」と、高い評価をいただきました。

『未来新聞プログラム』は、職業、年齢、性別、能力、国籍などを問わず誰でもアイデアを楽しみながら出して未来の新聞を書くことで、未来を自発的に変えて行くことができるシンプルなプログラムです。多様な人がステークホルダーとして参加する地方創生の場面においては、この特徴が大いに機能します。

「みんなの未来」では、プログラムの最初の数日、遠野市内でフィールドワークを行い、そこで得た情報を材料にして『未来新聞』を書きあげて行くのが大きな流れとなっています。ここから『未来新聞プログラム』について説明します。

1.『未来新聞プログラム』について

『未来新聞プログラム』は、冒頭は創造力・想像力を高めるための方法として「アイデア脳になるための法則」と題した座学で始まります。その後弊社独自の「アイデア出しメソッド」を用いてアイデアを出し、これを他の人と意見交換を行って磨きをかけてから『未来新聞』の形にします。

2.「アイデア脳になるための法則」について

現状では、「アイデアを出してください」と言っても、出せるのは一部の、「アイデア出しが得意な人」だけになりがちです。アイデアを出せない人は「自分はアイデアが出せない」と、より萎縮してしまい、結果マイナス効果すら出かねません。「アイデア脳になるための法則」（以下、「法則」という）によって、この「アイデ

アが出せない」という思いこみから解放されます。アイデアを出せる人と、出せない人の違いは、意外と皆さんが思うよりも小さいのです。

一例として、「法則」の最初に出てくる「アイデアピラミッドの法則」について説明します。

「優れたアイデアを出すためには、一見無駄に見えるようなアイデアが出てくることを許容し、沢山のアイデアを出さなければならない」という法則です。今やＡＫＢ48のプロデューサーとして大成功している秋元康さんの講演を以前拝聴したことがありますが、秋元さんは当時、「７曲のミリオンセラーを出すのに、300曲発売した」と言っていました。天才としてあがめられる秋元さんですら、この確率です。普通の人の場合はもっと確率が低いはずです。そのため、良いアイデアを出すためには「大量の屍」のようなアイデアが出てくることを最初から許容しておかないといけません。ピラミッドの高さが底辺の長さによって決まるように、アイデアのレベルの高さは、出したアイデアの数によって決まることが多いのです。

これまでの教育では常に正解を出すことが求められてきました。そのため優等生であればあるほど、１つアイデアを出して、それを当てようとしがちです。この考え方では、脳の機能がプレッシャーによって萎縮してしまい、現状を打破するような自由で伸びやかなアイデアを出すことは難しいのです。

「アイデアピラミッドの法則」を学ぶことによって、アイデアを「１分の１」で当てようとする優等生的な気質の人でも、自由闊達なアイデアを出すための最初の一歩を踏み出せるようになります。

「法則」には「アイデアピラミッド」以外にも６～12個（時間の長さによる）ありますが、どれも「あ、そんなことだったんだ」と思う内容です。これらの法則は「そのものずばり」の話が多く、誰でも簡単に理解できるものばかりです。（アンケートでは毎回「分かりやすい」が大多数）

3．弊社独自のアイデア出しメソッドについて

「アイデア出し」という、従来個々人の、いわゆる「暗黙知」（経験や勘に基づく知識）になっていることが多いスキルについて、アイデアがどのような機序によって生まれるかを分析し、非常にシンプルなメソッドにまとめました。これらを学び、練習していくことによって、誰でも具体的に、意外性のあるアイデアを沢山生み出すことができるようになります。

4．『未来新聞』について

未来のことについて未来の日付を付けて、あたかもそれが既に起きた出来事であるかのように、新聞記事として描く手法のことです。小学生を対象にコンクールなどで使われた歴史があります。（『未来新聞』商標は筆者が保有）

（１）『未来新聞』の主な効果

①アイデア発想を促進する

アイデア発想が苦手な人でも、「新聞形式」で未来のことを過去形で描くことで視点が自然に未来に移動するので、気軽にアイデアを出しやすくなります。

②アイデアの内容・価値が理解されやすい。

新聞記事は、社会人が最も慣れ親しんでいる文章ですし、見出し→本文という構成がもともと分かりやすいものです。そのため誰でもそこに書かれた「アイデアの内容・価値」がすぐに理解できます。この効果により、地方創生の場面では、アイデアが共感を呼びやすくなり、協力者が自然に集まるなど、実現可能性が上がっていきます。

③短時間で、信頼関係の構築ができる。

『未来新聞』には、書いた人の普段の生活では表れて来ないような深い内面が出てくるので、『未来新聞』を描いて見せ合うことは、究極的な自己開示となります。これにより相互理解が進み、初めて出会った人同士でも短時間で仲良くなれます。

④現実化の促進。

未来のアイデアを、「過去形」や「現在形」の新聞記事形式で描くことで、書いた人や読んだ人は、それがあたかも既に実現しているような感覚になります。そのため、そのアイデアがまだ実現していないことに違和感を覚え、実現させたいと強く願うようになります。『未来新聞』は、描いた未来を「画餅」にせず、現実化するために大変有効な手段です。

(2)『未来新聞』の理想的な導入例

遠野でのお話は第２部に譲るとして、最近の導入事例を紹介します。ある電力会社子会社で、研修時に19人ほどで非常に熱心に取り組んだのですが、研修後２、３回未来新聞方式でのアイデア出しと執筆の練習をしたそうです。その後２か月ほどして、ある企業による未来についてのプレゼンテーションを見てからアイデア出しをするという場面が設けられました。私も同席させていただいたのですが、皆さんが驚くほどスラスラとアイデアを出せる様子を目の当たりにしました。以前は円滑にアイデアを出すのが非常に難しかったのに今ではスムーズにアイデアが出るようになったと感謝されました。その場限りの研修ではなく、しっかりとしたノウハウが学べるため、研修後に少しの練習をするだけでこのような効果を出すことができます。

5．第１部のまとめ

『未来新聞プログラム』は、「シンプルでありながら、効果が大きい」プログラムです。遠野でどのようにこの『未来新聞プログラム』と、それを包括する「みんなの未来」が花咲いていったかについては第２部の記述に譲ります。

第２部　遠野における『未来新聞』活用事例

有限会社ウィルウィンド代表取締役　冨田直子（とみたなおこ）

岩手県遠野市にある「遠野みらい創りカレッジ」（以下カレッジ）は、閉校となった旧土淵中学校の校舎を使い2014年４月に開校した交流の場です。カレッジは、遠野市と富士ゼロックス株式会社が東日本大震災の復興支援活動をきっかけに、「産官学民が知恵を出し合い、被災地の後方支援拠点としての取り組みをさらに進めるとともに、市が抱える少子高齢化や、街の活性化といった課題の解決、そして地域と企業とが相互に新たな価値の創造を行っていく」ことを目的として設立されました。そして2016年４月、カレッジはより地域に根差した運営母体となるため、「一般社団法人遠野みらい創りカレッジ」として法人登記されました。

弊社ではカレッジ開校時から、カレッジが掲げるテーマのうち「産業創造」と「地域リーダーの育成」を実現すべく、未来新聞株式会社とタッグを組み、カレッジとの共同企画という立ち位置で「みんなの未来」（第１部既出）を企画開発・運営・進行してきました。ここからは「みんなの未来」、そしてこのプログラムの中で『未来新聞』がどのように活用されているのかについて詳しくご紹介します。

1.「みんなの未来共創プログラム」とは

(1)概要

首都圏や東北の企業を中心とした「チャレンジ企業」が、産官学民の「サポーター」と共に未来ビジョンを作り出し、遠野や東北での事業共創の可能性を探る約2か月間のプログラムが「みんなの未来」です。この背景には、カレッジが着実に築き上げてきた、遠野市との緊密な関係性があります。

「チャレンジ企業」とは、遠野又は東北地域での新規事業の共創を行うべく「みんなの未来」に参加した企業です。また「サポーター」とは、「地域活性化や事業共創の方法について学びたい」、「遠野や東北の課題について知りたい」等の目的で参加し、チャレンジ企業を支援する産官学民の法人や個人です。

「みんなの未来」は2014年度に第1回目を実施して以降、毎年継続されるカレッジのメインプログラムの1つになりました。これまでに参加したチャレンジ企業は約30社。遠野、東北の企業を中心に、首都圏からの企業にも参加いただいています。また、サポーターには、首都圏や東北地方からの産官学民の他、遠野の住民を含め、130人以上の方が参加されてきました。遠野市役所の3年目の職員も毎年一定数参加、また今年は岩手県庁職員の参加もありました。

(2)ゴールと設計思想

「みんなの未来」のゴールは、チャレンジ企業の5年後の仮想事業を『未来新聞』形式で描き、未来づくりの足掛かりにしていただくことです。ゴールを「仮想事業」とすることで余計なプレッシャーがなくなり、気軽に楽しむことができるので、自由闊達な質の高いアイデアが生まれやすくなります。その結果、もともと「仮想」であったにもかかわらず、チャレンジ企業の8割以上が、プログラム終了後になんらかの「現実」のアクションに踏み出すという成果を出しています。

単なる研修を超えてリアルなプロジェクトへの移行を目指す際、特に大切にしている3つのポイントがあります。

1つ目は、「参加者の内発的動機を醸成すること」です。いくら良いアイデアやプランであっても、心底実現したいと思わないようなことは現実化しません。

2つ目は、「臨場感ある未来ビジョンを描くこと」です。オリンピックの金メダリストは、優勝した時の様子を試合前からありありと描けているといいます。何かを変えようとする人にはそれと同じように未来を臨場感をもって描く力が必要です。それさえできれば、実行フェーズは未来ビジョンに向かう段取り整備とタスク管理という具体的なプロセスになり、実現に向けたフットワークが軽くなっていきます。

3つ目は、「仲間と未来ビジョンを共有すること」です。思い描いたビジョンを共に動く仲間と共有し、誰がどの立ち位置でどのように協力していくのかも含めてありありと見せられれば、それは彼ら自身の「自分事」へと転換します。その結果、未来ビジョンが「それを描いた人だけのもの」から「みんなのもの」になり、「共創」への第一歩が踏み出されるのです。

これら3つのポイントが『未来新聞』プログラムでカバーされ、実際の成果を生み出しています。

(3)「岡目八目」を活かすチーム編成

「みんなの未来」では、「岡目八目」でアイデアを出し合うことを前提としたチーム分けをしています。「岡目八目」とは、「当事者より、端から見ている第三者の方が事態を客観的に判断できる」という囲碁の世界からきた言葉です。これを最大限に活用できるよう、ワークショップのチームは「当事者」であるチャレンジ企業1社に対し、「第三者」となるサポーターを3、

４人、できるだけ属性が多岐に渡るよう配置じて構成しています。この「岡目八目」を使った「共創」の仕組みがチャレンジ企業とサポーターの間で相互作用を生み、サポーターをも巻き込んだ『未来新聞』の内容の現実化を促進しています。

2.「みんなの未来」の流れと『未来新聞プログラム』の果たす役割

２か月間かけて行われる「みんなの未来」は、「共創セッション」、「中間セッション」、「発表セッション」という３つのセッションに分かれています。それぞれのセッションごとに、プログラムがどのように進み、『未来新聞』がどのように活用されているのかをご説明します。

(１)共創セッションと『未来新聞』

共創セッションはプログラムの全参加者が遠野に集結して行う２泊３日のセッションです。

初日は、チャレンジ企業が主体的に取り組みたいテーマについて全参加者の前で発表する「魂のプレゼン」の時間から始まります。各参加者はこの時間を使ってチャレンジ企業の事業概要と、取り組むテーマを正しく理解します。

つづいてチャレンジ企業のテーマに沿ったフィールドワークを行います。チームに別れて各チャレンジ企業を訪問したり、遠野市内を周って地域課題を学んだり、チャレンジ企業のテーマにおいて「顧客」となる方との対話会などを実施し、後にアイデアを出すためのインプットを行います。半日強という極めて限られた時間で効率を最大限にできるプログラム設計になっています。

２日目は「みんなの未来」の中核となる、各チャレンジ企業のテーマに沿ったアイデア出しを行うワークショップです。

ここで午前中に登壇いただくのが未来新聞株式会社の森内真也先生です。第１部にある「アイデア脳になるための法則」の講義の後、未来新聞社独自のアイデア出しメソッドが伝えられます。2017年度は、この講義部分に関しても弊社が未来新聞株式会社からライセンスを受けて実施しました。

続くアイデア出しでは、まずは各個人が、自分が担当するチャレンジ企業のテーマに沿ったアイデアをポストイットに出していきます。前日までのインプット情報と、アイデア出しメソッドを駆使し、通常のアイデア出し手法では出ないような大量のアイデアが出るのが特徴です。約15分で１人10個から20個のアイデアが出てきます。ここで興味深いことは、チャレンジ企業自身よりも第三者的立場のサポーターの方が多くのアイデアを出すのが通常であるということです。「自分ではなく他の人のことなら分かる」という、「岡目八目」の効果がはっきりと見て取れます。

次に各個人で出したアイデアをチーム内で発表し、ディスカッションを通じてさらにアイデアを増やしていきます。各チーム、「他の人の意見を否定しない」、「否定厳禁ルール」の下で次々と発想を広げ、新しく生まれたアイデアをポストイットに書いて追加していきます。そして最後に各人の心に一番響くアイデア、一番「やってみたい」「好きだ」「おもしろい」と思うアイデアを、チーム全員分のアイデアの中からそれぞれ１つだけ選んでもらいます。この場合チャレンジ企業が選ばないようなアイデアをサポーターが選ぶことが多いです。これもまた、「岡目八目」の興味深い側面です。

２日目の最終ワークは、各人がそれぞれに選んだアイデアをベースに、チャレンジ企業が成功する５年後の『未来新聞』を各人で執筆する時間となります。

『未来新聞』執筆の際には「チャレンジ企業とその担当者を実名で登場させること」、「『未来新聞』に描かれた『新商品・新サービス』に対する未来の『お客様の声』を入れること」を

条件とします。チャレンジ企業の当事者意識を高め、かつ受益者の立場に寄り添ったビジョンを描いてもらうためです。その上で「未来のことなので、無責任で大丈夫。思い切り楽しくクレイジーに描いて下さい」とお伝えします。『未来新聞』ワークシートの端には５Ｗ１Ｈのメモ欄を付けています。これに最初に書き込むことで、新聞記事を描きやすくします。新聞記事形式は社会人が一番慣れ親しんだ文章の形ですから、「新聞記事っぽく書きましょう」と言うだけで、ほとんどの方がすぐに理解し、約20分という短い執筆時間で、分かりやすい未来記事を書き上げてきます。

執筆中は第１部にある「『未来新聞』の主な効果」の「①アイデア発想を促進する」が各個人の頭の中で起こります。「筆を動かしてみるまでどんな内容に仕上がるのか分からないのが不思議な感覚でした。しかしその気になって書くと、自分の内側から自然にアイデアが湧き出てきてとにかく楽しかったです（第１回チャレンジ企業　前東洋SCトレーディング：花房明子さん）」「『未来新聞』の一番の魅力は、実現したらどんなに面白いことになるだろうと想像してポジティブな言葉を紡いでいくところにあると思います（第１回チャレンジ企業　まつだ松林堂：松田希実さん）」

執筆後は、各人が執筆した『未来新聞』を全員の前で読み上げる発表タイムです。聴覚からだけの情報が聞き手の想像力を刺激し、活き活きとした未来が「すでに起こったこと」として参加者の脳裏に広がっていきます。

その間、「『未来新聞』の主な効果」の「②アイデアの内容・価値が理解されやすい」「③短時間で、信頼関係の構築ができる」が表出します。第４回チャレンジ企業のお一人は、サポーターが描いた自社の『未来新聞』を聞いた直後、それまでは思ってもみなかったご自身の前向きな未来がありありと見えたこと、またチームメンバーがこれほどまでに自社を応援してくれることに目頭を押さえられました。多くのディスカッションを経ているため、サポーターはチャレンジ企業が望み、実現したい価値を記事の中で的確に押さえてきます。さらに、プログラムの中で徐々に出来上がってきた「場の力」もあって、サポーターはチャレンジ企業の想像を超える未来を描いてきます。「記事の中にみなさんが喜ぶだろうなということを入れると、すごく喜んでくださるのもとてもうれしかったです（前出：花房明子さん）」という言葉に代表されるように、サポーター側も大いに楽しみ、チームの一体感と絆が生まれていきます。

３日目はチャレンジ企業同士のコラボレーションを考えるワークショップです。各チャレンジ企業同士で連携するとしたらどのようなことができるのかを２チームずつのペアを作って話し合い、アイデアを出し合います。最後には再びそれぞれが一番おもしろい、やってみたいというアイデアをベースに、関係するチャレンジ企業や担当者を登場させた『未来新聞』を描き、発表し合います。誰がどのような立ち位置で行動すると何が起こるのか、新聞形式という分かりやすい形で活き活きとした未来ビジョンが共創される時間です。

共創セッション終了後、各チャレンジ企業はこの２泊３日で出た様々なアイデアや『未来新聞』の中から、一番実現させたいと思うものを１つ選び、『未来新聞』の清書を行います。最終的に事業を牽引するチャレンジ企業のメンバー自身が自発性、内発的動機を強め、未来のイメージを着実に膨らませていくことが目的です。

（２）中間セッションと『未来新聞』

共創セッションを終えてから１か月ほどして行われる中間セッションは、遠野と首都圏の会場をテレビ会議システムで結んで、約３時間に亘り行われます。チャレンジ企業が清書してきた『未来新聞』を全員で読んだ上で、チャレンジ企業が新たにアイデアが必要であると考える

ポイントについて、全参加者がその場でアイデア出しを行います。すでにアイデアの出し方を体得しているので、短時間であっても多くのアイデアが出されます。

チャレンジ企業は中間セッション終了後、『未来新聞』をブラッシュアップし、実現に向けた5か年計画や、初年度に具体的に行うこと、実現する場合に必要なプロジェクトチームメンバーリストを作り、最終発表に備えます。

(3)発表セッションと『未来新聞』

発表セッションは、全参加者が再び遠野に集結して行う1泊2日のセッションです。

初日は参加者が、チャレンジ企業が最終的に描いた『未来新聞』の内容を遠野の街に出て検証するフィールドリサーチの時間です。通常の新聞記事の見出し同様、『未来新聞』の見出しは未来のアイデアを「短い文章で的確に表現したもの」になります。これにより、インタビューをする街の人や観光客にも分かりやすい形でアイデアを伝えることができます。「『未来新聞』の主な効果」(第1部参照)のうち「②アイデアの内容・価値が理解されやすい」という特徴が、ここでも役立ちます。

2日目の午前中は、1つの記事に全チャレンジ企業がなんらかの形で連携して登場し合う『未来新聞』を各人で描き発表し合います。それぞれのチャレンジ企業が手を取り合うことで、1社では実現できないスケールの未来が描けることを、『未来新聞』という形式を使ってイメージします。また今年は、『未来新聞』を実現するためのプチトライアル計画の立案も行いました。

2日目の午後は、いよいよプログラムの最後を飾る「最終発表会」です。市長、副市長、チャレンジ企業の他の社員(主に上司)、関係者を招き、各チャレンジ企業による『未来新聞』の読み上げ、5か年計画、初年度計画、プチトライアル計画、フィールドリサーチの結果報告や今後に向けた意気込みなどを発表して終了です。

「チャレンジ企業とサポーターとの繋がりや、チャレンジ企業同士の繋がりが新しい発想を生み出し、1人ではできないことが、仲間と力を合わせればできるようになることを実感した。(第4回チャレンジ企業:井上光樹様)」、「初めは夢物語で終わりそうな新聞でしたが、回を重ねる度にリアル感が増し、実現出来ると感じるようになることがすごいと思った。(第4回サポーター:遠野市 小田島洋子様)」等のありがたい言葉を今年も沢山いただきました。

3. 現実の新聞記事になった『未来新聞』の例

チャレンジ企業の描いた『未来新聞』が、後に本物の新聞記事となった例を2つご紹介します。

(1)一日市商店街「まち市」

第1回目のチャレンジ企業となった遠野市一日市商店街の老舗和菓子屋「まつだ松林堂」の松田希実さんは、シャッター通りとなった商店街の活性化をと、5年後を想定し「2020年7月　物語を生み続ける商店街」という『未来新聞』記事を発表しました。「この日は商店街が主催する『まち市』の5回目。かつて店主の高齢化や後継者不足に悩み閉店・廃業した店舗の軒先に、手作り感あふれる小さな店が並んでいる」と続く『未来新聞』には「世代間交流や販売体験学習といった子ども達の教育の場ともなっており――」という記載もありました。

松田さんはその後、カレッジから西洋の妖精「ゴブリン」を生み出すアーティスト、小中大地さんを紹介いただき、その年から実際に「まち市」を小規模であってもやろうとスタート。2015年度、2016年度、2017年度と商店街店主や中学生、高校生、また他のチャレンジ企業やカレッジを巻き込んだ活動を続け、その様子は次々と現実の新聞記事として一般紙に掲載され

ていきました。今年のはじめに松田さんとお会いしたとき、新聞記事を見ながら「これって本当にあのときの『未来新聞』が実現したんだと思いました」と言っていただきました。

(2)天空ウエディング

第３回目のチャレンジ企業、農家民宿Aguriturismo大森家の大森友子さんは、遠野を一望できる高清水高原にカフェを開きたいというテーマを持って参加されました。そして描かれた５年後の『未来新聞』の中に「天空カフェでウエディング」という記載がありました。

そのプログラム終了から１か月後、カレッジのスタッフが結婚されました。すると大森さんが「あの『未来新聞』を実現しよう」と提唱され、その２か月後には高清水高原での「天空ウエディング」がスピード実現したのです。

このとき実行委員としてコラボレーションしたのはチャレンジ企業７社とカレッジ。それぞれが互いに登場しあう『未来新聞』を書いていたので、前向きなビジョンの共有はできていました。印象的だったのは、タクシー会社、遠野交通社長前川敬子さんの準備中の一言。「私、『新郎新婦を乗せたタクシーが天空に上がっていくところを、北日本朝日航洋さん（チャレンジ企業）のドローンが上から空撮する』っていう『未来新聞』を描いたから、やらなきゃ」。頭の中ではすでに起きたことになっている「未来」に現実を少しでも近づけようとする『未来新聞』の効果「④現実化の促進」が起こっているのを目の当たりにした瞬間でした。

「天空ウエディング」の様子は各新聞をはじめNHKでも取り上げられました。終了後の振り返りでは実行委員の中から「『未来新聞』が次々と実現していく快感」という言葉が出ました。この時の実行委員たちでできた新組織OSKカンパニーは、現在遠野をはじめ東京でも様々なイベントを企画実施するようになっています。

他にも新聞記事になった事例が複数あります。この春第４回プログラムを終えたばかりのチャレンジ企業、遠野Edu企画の赤坂康紀さんも活動を開始するや「遠野の元中学教諭　教育コンサルに転身」と題してこの５月、岩手日報に紹介されました。

また、沖縄ツーリスト仙台支店支店長、高橋繁樹さんもすでに新たな遠野ツアーを６月に１つ実現し、２つ目を８月に予定、さらに、障害者雇用をテーマに参加されたテンポ社社長松田篤さんも新しいまちづくりのための調査や視察をはじめています。『未来新聞』からさらに多くの本物の新聞記事が誕生することが期待されます。

4．おわりに

「『未来新聞』をみんなで描く」『未来新聞プログラム』は、どなたでも楽しみながら効果を共有しあえるプログラムです。

第２回目のチャレンジ企業、遠野の造り酒屋、上閉伊酒造の新里佳子社長は「参加直後、『未来新聞』でも描いた遠野市と姉妹都市であるイタリア、サレルノ市へ偶然にも派遣され、見えない力のようなものを感じました」と話されます。その後、新里さんは２年連続してサポーターとして参加されました。「サポーターであってもチャレンジ企業の役に立ちつつ、自身の勉強やコラボでの事業チャンスを発見できる」とおっしゃいます。サポーターを２回ご経験されたのちチャレンジ企業となった株式会社LIXILの研究員並木学さんは、「『未来新聞』はコンセプトを具体的に表現できる、子供でもできる簡単な方法」だと、社内でも愛用いただいています。

地域での未来共創活動に『未来新聞』を使うプログラムは、カレッジの横展開ビジョンに伴い神奈川県の南足柄市へと展開しています。

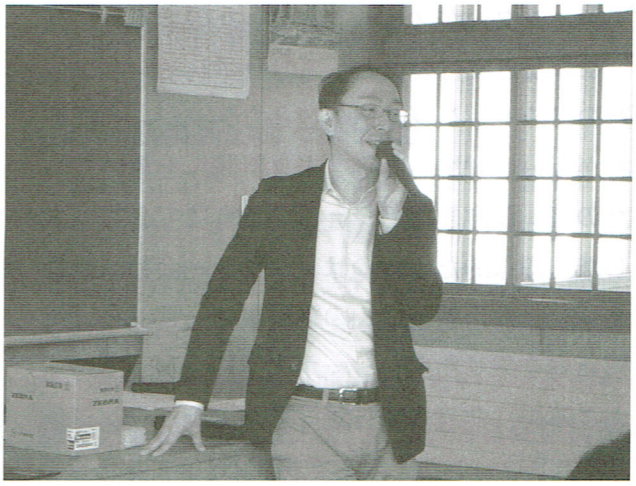
プログラム参加者は、アイデアを自在に出し、

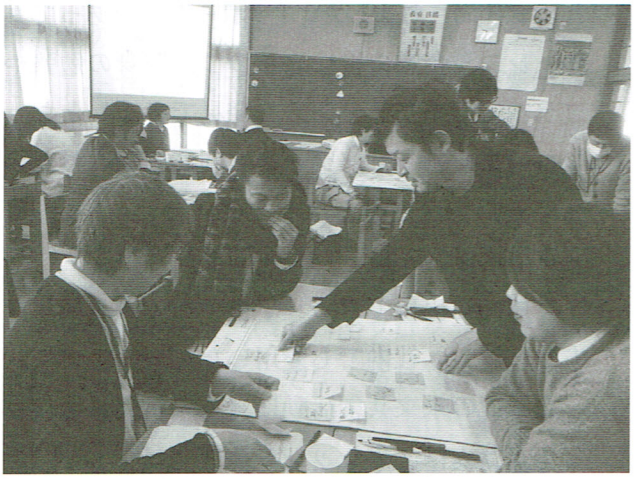
未来ビジョンを鮮明に描いて共有し、未来を変えていけるツールを手にしています。今後も、『未来新聞』を活用し、「一人の未来」を「みんなの未来」に昇華し、周囲を巻き込みながら各地で新たな事業を推進していかれることを願っています。

【第１部】　森内真也（もりうち しんや）
未来新聞株式会社　代表取締役
弁理士
1998年司法試験合格。2008年未来新聞㈱設立。「クリエイティブ研修」を2012年、「未来新聞®プログラム」を2013年提供開始。
一部上場メーカー、国際協力機構（JICA）などを対象に研修プログラムを提供。
2015年～JTBにて「未来新聞で人が変わる、組織が変わる～アイデア創出で未来ビジョンを描く～」取り扱い開始。
2017年２月18日、サントリー食品インターナショナル「新しい“飲む”、のデザイン」コンペ優秀賞受賞。
2017年３月に東京工業大学教育革新センターにて教員対象に研修プログラム提供。

【第２部】　冨田直子（とみた なおこ）
有限会社ウィルウィンド　代表取締役
朝日アーサーアンダーセンにて経営コンサルタント、GEにてシックスシグマのブラックベルトとして社内外のコンサルティング、AIGにて日本・韓国地区団体保険担当の経営企画に従事。
2005年８月「過去～現在～未来をつなぐ会社」有限会社ウィルウィンドを設立。社史や家族史の制作、企業研修サービスの提供、地域の未来共創活動を支援中。

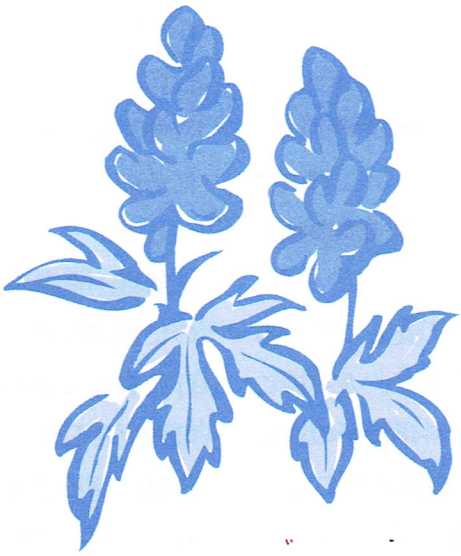
遠野みらい創りカレッジ


未来新聞株式会社　代表　森内真也氏による講義


未来新聞ワークショップの様子

未来新聞を街の人に見せて意見を聴くフィールドリサーチ

まつだ松林堂　松田希実さんによる一日市商店街活性化の取り組みが紹介された一般紙

天空ウエディングも一般紙で取り上げられました

「みんなの未来共創プログラム」過去４年の参加者たち